HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カルメラ焼と虫下し
Author(s)	逸見, 勝亮
Citation	ほけかんだより, 33, 1-1
Issue Date	2003-09-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39247
Type	article
File Information	hemmi_hokekan33.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第３３号

ほけかんだより

北海道大学保健管理センター

「カルメラ焼と虫下し」

大学院教育学研究科教授　逸見　勝亮

伯父が白い布をよけて父幸雄の顔を見せてくれたのが、死と対面した最初である。1948年３月２３日のことである。祖母は「お前の父さんは甘いモノが好きだったので盲腸で死んだ」と繰り返し言った。父は甘いモノを好んだらしく、玄関先で七輪に火をおこして長い柄の小さな半球状の鍋でカルメラ焼をよく作ってくれた。澱粉飴なるものを大鍋に作ったこともあった。

母の遺品に叔父宛の葉書がある。1943年１月１日の消印がある１枚には「（幸雄は）又こんどは腸がつまって今日手術することになりました。危険な手術です」と父の病気を記してある。腸閉塞であろうか。「幸雄も半年休み今月一日から出勤して元気になりました」とあるのは、1943年６月４日付である。母からは「盲腸手術後に癒着がひどくて急死した」と聞いていたが、敗戦前の腸の手術については聞いたことがなかった。

祖母はまた僕に幾度となく「本を読むと結核になる」と言い聞かせた。我が家に書物がないのはその故かと思っていたが、弟が物置から岩波文庫がいっぱい詰まったトランクを見つけ出したことがあった。祖父が肺結核で亡くなり、祖母は３人の子どもを連れて祖父の弟と再婚した、と知ったのは僕が５０歳になってからである。岩波文庫と先の葉書は「実の祖父」のものである。「本を読むと結核になる」という祖母の言は、彼女の人生と重なっていて今も哀しい。

注射針の最も古い記憶は学校で受けた結核感染の有無を調べるツベルクリン検査である。１年生の通知表には「ツベルクリン皮内反応」は「陰性」とある。２・３年生の通知表に「ツベルクリン反応」欄はなく、４年生の通知表では「陽性」とある。ツベルクリン反応が何のことなのかは知らないまま、ＢＣＧを施されるのが厭だとツベルクリン反応の赤斑をこすって大きくした級友もいた。ＢＣＧはメスで皮膚を切って牛型結核菌を植え付ける措置で、とても痛かった。３年間のＢＣＧの痕跡は今も僕の左腕に明瞭である。

この通知表は、「学習のようす」「行動のようす」と「身体のようす」からなっている。「身体のようす」には、身長・体重などの体位とともに、体のつりあい・姿勢・栄養・活力・耐久力・運動機能・皮膚の色つや・眼・耳・歯牙という項目がある。僕の自覚と違って、運動機能欄には「すぐれている」とある。視力は空欄なので検査しなかったのであろう。齲歯はないが、担任は「歯磨きの励行」と書いている。子どもの健康状態の観察と記録は担任の仕事であった。「歯磨きの励行」には今でも赤面する。

僕は1950年に室蘭市立天沢小学校に入学し、１年から４年までは同じ級友たちと過ごした。僕は僕の少年時代を再現する一環として級友達の消息を確かめ、２年生になったときにはクラスにいなかったＳと４５年ぶりに会った。彼は進級しなかった事情は結核で休んだからだと説明した。入学して間もない頃に、僕はＳを家に訪ねたことがある。表紙が朱色の書物が並んでいるのがうらやましかった。僕の家には本がないのだと思い知ったときでもある。別に、Ｋからも同じ事情で進級せず、Ｈからは３学期はほとんど学校を休み自宅で療養していたと聞いた。点灯しているのを見たことがなかった保健室の太陽灯の照射を、Ｈは幾度も受けたと話してくれた。同級生５８人中３人は結核にかかっていたのである。僕は長期欠席を知らずにいたが、子どもに知らせるべきことがらでなかった。

検便試料の提出先も、チョコレートに含んだ虫下しを配ったのも学級担任であった。どの家も汲み取り式の便所で回虫と蠅のウジがうごめいていたが、人糞は自給していた野菜の重要な肥料であった。隣家の女児がバケツに一塊りの回虫を吐いたこともあり、母は弟の蟯虫退治に精を出していたから、寄生虫はその名のとおり身近な存在であった。入口にサナダムシ・回虫などの模型を展示してある日本製鋼所病院は、長じてもなお気味悪い場所であった。甘い虫下しを最後に飲んだのは1953年だったろうか。僕は学校以外で虫下しを飲んだことはない。

毎日授業終了後に、学級担任は僕らに前へ出て口を開くよう指示し、液状の肝油をスポイトで注いだ。１学期と２学期の修了日には、通知表と一緒にゼリー状の甘い缶入肝油を受け取った。１日１粒との注意を受けたが、守れるはずはなくあっという間になくなった。栄養剤との説明を受けたが、どのような効果があったものであろうか。

近代の所産である小学校は、子どもの集団としてはもちろんのこと、社会的集団としても最大の規模であろう。1920年代後半には子どもの皆就学がほぼ実現していたから、国民の健康管理にとって小学校はまことに好都合な場であった。この国の小学校は単なる「学舎（まなびや）」ではなかった。

父が３４歳で亡くなったことは僕の死生観を支配し、通知表のあれこれの記載と寄生虫の記憶は、日常の健康管理に深く浸透している。

僕は甘いモノを食べるたびに父が作ってくれたカルメラ焼と虫下しを思い出している。